

## ◆祝辞

# 建築研究協会創立70周年に寄せて

理事・京都女子大学教授 鶴岡 典慶

このたび、一般財団法人建築研究協会が創立70周年を迎えられ、これまでの長きにわたり文化財保存をはじめ日本建築の発展に多大な御功績を残されてきました歴代の研究員等の皆様に対し敬意を表しますとともに、心よりお慶び申し上げます。

私は、昭和57年から令和2年まで京都府で文化財建造物の保護に携わってきましたが、その中で文化財建造物の防災対策や構造補強、そして美術工芸品の保存施設（収蔵庫建設）について、素晴らしい技術を持った本協会の方々と多くの事業でご一緒させていただきました。ここではその一端として防災対策についてご紹介させていただきます。

私が着任した当時の昭和50年代後半は、文化財防災の自動火災報知設備、消火設備、避雷設備を総合防災と位置づけ、その設置の促進を進めていました。自動火災報知設備では、文化財建造物は景観的配慮から空気をういた差動式分布型感知器の使用が主流（現在もほぼ変わらず）で、建造物の天井部分に直径2mmの銅管をステップで止めていく施工が行われますが、設計と監理によって施工の良否が大きく異なります。協会の技術者は、銅管を這わせる位置（廻縁や棹縁の詳細な箇所）を細かく事前に指示し、職人さんの妥協を許さず、とにかく厳密な施工に拘ってこられました。これは、文化財建造物の価値を理解した設計者であるからこそ成し得るもので、廻縁の中央など安易な位置に止めてしまえば非常に目立ってしまいますし、貼り替えれば不用なステップの穴が傷となり取り返しがつかない文化財の破壊になります。空気に限らず設備配管の文化財への影響を最小限に留めるような防災設備に対する取組意識と技術は、文化財建造物修理技術と相通じるところがあり、それらを総合的に有する本協会だからこそその技術力であると思いました。

消火設備では、先端技術の開発によって製造された放水銃等を文化財防災へ取り入れてこられたことです。例えば銃の胴部の管を曲げ、水の整流性能を高めた京大式放水銃（現在この呼称は聞かれない）の文化財防災への導入と普及は、研究機関と関係が深い本協会だからこそその実績であると思います。その他大規模建築に対してノズルの中に螺旋状に羽をつけて飛距離を伸ばす（これはピストルの銃口を参考に開発したとのこと）放水銃の採用など、文化財個別の課題や要望に対し様々な発想力や機動力を発揮して先進的消火設備設計を進めてこられました。

最近では耐震対策や保存活用計画策定など、文化財の保存対策も広範になってきていますが、文化財建造物に精通した常勤研究員とともに多様な研究者が非常勤研究員として多数所属する本協会の組織力は、これからの様々な課題に対しても先導的な役割を担っていただけるものと大いに期待しております。

最後に、今後の本協会の更なるご発展、ご活躍をご祈念申し上げお祝いの寄稿とさせていただきます。